

ことわざの内容から形式へ：温端政著、高橋均・高橋由利子編訳『諺語のはなし：中国のことわざ』

中里見，敬  
山形大学教養部中国語研究室

<http://hdl.handle.net/2324/6457>

---

出版情報：東方. 162, pp.32-35, 1994-09-05. 東方書店  
バージョン：  
権利関係：



## ことわざの内容から形式へ

中里見敬

温端政著／高橋均・高橋由利子編訳

諺語のはなし―中国のことわざ

四六判 二九六頁

光生館 二二八四円(税込)

何が表現されているかという内容の研究が主として思想を問題とするのに対して、いかに表現しているかという形式の研究は言語そのものを問題とする。言語が記号内容と記号表現の二面の連合であり、しかもその両者の関係は恣意的であるとしたのはソシユールであった。言語の中で特異な位置を占めることわざは、

「民族の知恵の結晶」のように内容面から称賛されることばかり多く、形式面や形式と内容の連関、さらにはソシユールのいう恣意的ということの問い直しといった関心から論じられることは少なかった。

中国で出版されることわざ辞典を見てみると、発音順や筆画順に混じって、内

容分類によって排列するものが目立つ。これは中国の辞書が、内容分類(『爾雅』・部首分類(『説文解字』・発音分類(『切韻』)の順に発展してきたことや、現在でも発音排列の『現代漢語詞典』に対して、部首排列の『辞源』のあることなどを想

起させる。

このように排列方法一つをとっても、ことごとわざに関しては内容重視の傾向が顕著だ。その結果、ことわざの表現形式の言語に占める位置づけといった問題は、十分明らかにされていない。一般言語学の立場からは、例えばクリスタルの『言語学百科事典』（大修館書店、一九九二）では、「最も興味深い特徴の一つは、多くの諺は、釣り合いのとれた二つの部分に分けることができるということであり、文構造・リズムの面で平行的であり、脚韻・頭韻を踏んでいる場合が多い」といった最大公約数的記述にとどまっております、個々の言語におけることわざ

の形式を体系的に記述することは、個別言語学の課題として残されている。

本書は、ことわざの定義から始まって、中国語のことわざの全体像を明らかにしようとするもので、決してその形式面のみ重点を置くものではない。にもかかわらず、上述のような関心から本書を手にした評者にとって、本書は類書の中で最も充実したものであった。「ことわざの意味論」「ことわざの構造分析」「ことわざの文法的機能」「ことわざの修辞学」の各章は、豊富な用例と著者の分析に基づく、形式分析の実践となっている。以上の四章がことわざ内部の形式分析であるのに対して、冒頭の「ことわざと

は何か」は、周辺領域との対比によってことわざを定義しようとする試みである。すなわち、歌謡・成語・格言、また歇後語・慣用語・口語的成語が取り上げられ、それらとの差異の関係の中でことわざの位置を定めようとしている。

しかし、そのような著者の意図にもかかわらず、ことわざとそれ以外の境界がすっきりしないのはなぜだろうか。おそらくことわざを他の近接領域と区別するには、厳密な形式分析に加えて、意味論の分野へも踏み込む必要があるように思う。また成語のような近接領域だけでなく、日常言語・詩的言語を含めた言語活動全体の中でことわざを位置づけること

も有効だろう。とりわけ、言語遊戯とことわざの形式的類似などにも触れてほしかった。なぞなぞは既知の叙述によって、未知の主題をあてるのに対して、ことわざは叙述・主題とも既知であるというような指摘もなされている（池上嘉彦「なぞなぞ」と「ことわざ」、『ことばの詩学』岩波書店、一九八二）。このような観点からみれば、歇後語はある叙述によって、モノではなくコト的な主題を導き出すという意味で、なぞなぞとことわざの中間形態だと見なすことができよう。本書はどちらかといえば真面目な記述に傾きすぎて、ことわざに隣接すると思われるなぞなぞ、童謡、民歌やナンセンス詩などの多様な言語現象に触れる余裕のないことが惜しまれる。

#### 第4章「ことわざの意味論」では、

○寸草不生、五穀豊登  
のようにデノテーションの次元で意味作用が完結するものと、

○狗口里吐不出象牙  
のように字面の意味を超えたコノテーシ

ョンの次元で意味が働くものとに分類している。後者では「狗口里……」という特殊相での表現が、「悪人は正しいことを吐かぬ」という普遍相での意味を導き出し、さらにことわざの使用された状況に重ね合わされるという二重三重の操作が行われているのである。このようにことわざはデノテーションとコノテーション、特殊相と普遍相の往還のダイナミズムを意味の基礎としつつ、しかも発話の具体的な状況に応じて意味が現働化するのである。この現働化した個々の意味を本義と見なす一六頁の記述は不適切である。

一口にことわざといえども、上に挙げた二つの例は、意味生成の道筋に大きな違いが認められる。デノテーションの次元で完結するものは多くが農諺や氣象に関するもので、語呂合わせが定着したものと見えよう。こうした比較的素朴なものを見立てを必要とする複雑なものが、いずれもことわざという範疇に同居している理由は、両者に共通する何か

がことわざの必要条件であるからにはかなるまい。既知の表現を引用するという言表行為によって、現実の事象が創造的に発見される。そのような語用論的観点に、ことわざの核心が隠されているのかもしれない。ことわざによる世界の把握がレヴィイ・ストロースのいうブリコラージュ（『野生の思考』）に似ているからこそ、それを言霊として一挙に神秘化するのではなく、意味生成の論理を解きほぐす作業が必要だといえよう。

さて、成語が文言的であるのに対して、ことわざは口語的だとは、本書のみならず広く見られる指摘である（例えば、北京大学中文系現代漢語教研室編『現代漢語』商務印書館、一九九三、二五〇頁）。しかし、こういうときの文言／口語の概念はあまりにも自明なものとして扱われたいないだろうか。

#### ○麻雀雖小、肝胆俱全

といった例を挙げるまでもなく、ほとんどのことわざは相当程度の簡潔さを備えており、ふつうの口語とは距離があるよ

うに思う。我々中国語学習者が初めて耳にしたことわざを容易に理解できないのは、異文化のことわざを共有していないことに加えて、その非口語性も関与しているように思う。

ことわざが形式的に押韻・平仄・簡練・対句などの要素を備えている以上、これを中国語学習に用いない手はないと思う。入門段階での発音練習にも適切な短さだし、明瞭な音韻的特徴を備えているだけに、中国語の発音のエッセンスに満ちている。さらに中級に進めば、ことわざの文言的要素は書面語や古典語への橋渡しにもなるだろう。

このように本書は、母語話者としての

強みを活かしたことわざの言語的分析に成功しているだけに、教条的な史的唯物論に依拠した一部の安易な記述は不釣り合いに感じられる。

最後に、翻訳の日本語はとても自然で読みやすい。ことわざを含む用例のすべてに丁寧な訳文が添えられていること、巻末の索引が有用なこととあわせて特記しておきたい。

なぞなぞやことわざに子供が一時期熱中するのと同じようなことはどの蜜月を、外国語教師＝学習者は永遠に特権として与えられていることは、すばらしい幸せではあるまいか。

#### 関連文献

- 温端政『歇後語のはなし』（光生館、一九八九）
- 江口一久編『ことば遊びの民俗誌』（大修館書店、一九九〇）
- 相原茂『中国語なぞなぞの本』（東方書店、一九九〇）
- 相原茂・中国語倶楽部『中国語なぞなぞの本（2）』（東方書店、一九九一）
- 相原茂『午後の中国語』（同学社、一九九〇）成語や慣用語に関する項あり。
- 武田勝昭『ことわざのレトリック』（海鳴社、一九九二）参考文献が有益。

（山形大学）